様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 ２５ 日現在

機関番号：３４３０９
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2023
課題番号：１８Ｋ００１９５

研究課題名（和文）天平彫刻における造形的共通規範とその運用に関する研究

研究課題名（英文）A Study on the Common Sculptural Norms and Their Application in Tenpyo Sculpture

研究代表者
小林　裕子（Kobayashi, Yuko）

京都橘大学・文学部・教授

研究者番号：３０４０９６０１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,800,000円

研究成果の概要（和文）：多くの古代寺院では、本尊の仏像を丈六仏としていた。丈六とは釈迦の身長が一丈六尺とされることからの略称で、坐像は半分の八尺、これも丈六仏と称する。このように仏像の大きさは高さ（像高）で示されるが、経典や文献にも像高しか記されない。建築や工芸品と異なり、仏像に像高の情報しか要しなかったのは何故か。これが本研究の最大目的である。
報告者はまず、プロポーションを計画する際にある基準値＝造形的共通規範が存在したと推定し、７世紀から８世紀に制作された日本、朝鮮半島、中国の作例の画像解析をおこなった。そのうえで文献精査や先行研究から、像高（仏像の高さ）のあるポイントに基準値があると結論づけるにいたった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究で明らかにしようと試みた７、８世紀の造仏は、寺院造営を担う役所である造寺司の下位組織たる官営造仏所が牽引していた。そこには当時最高の技術を有す工人が所属し、最新のデザインと素材を用いて次々に新しい仏像を生み出していたのである。とはいえ現存作例をみると、似通ったプロポーションや顔立ちの仏像が多い。これら仏像制作の一端を研究することは美術史ばかりでなく、奈良時代文化の源流たる中国唐代や朝鮮半島といった東アジアを包括的に理解する手助けとなろう。さらには多くの人々が「仏像のつくりかた」の一部を知ることで、歴史学を通じて日本の古き美に興味を抱き、未来へ貴重な文化遺産を伝えていく意識を高められよう。

研究成果の概要（英文）：In many ancient temples, the principal Buddha statues were made as Joroku Buddhas. The term "Joroku" is an abbreviation referring to Shakyamuni's height being sixteen shaku (about 4.8m). Seated statues are half this height, at eight shaku (about 2.4m), and these are also referred to as Joroku Buddhas. The size of Buddha statues is thus indicated by their height, but only the height is mentioned in scriptures and ancient Japanese documents. Unlike architecture and crafts, why did Buddha statues only require information about their height? This is the purpose of this study.
The researcher first hypothesized the existence of a standard value = a common sculptural norm used when planning proportions and conducted image analysis of examples produced in Japan, the Korean Peninsula, and China from the 7th to 8th centuries. Based on this, and through examining literature and previous studies, the researcher concluded that there is a standard value at certain points of the statue height.

研究分野：美術史

キーワード：天平彫刻　奈良時代　官営造仏所　造仏

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

報告者はかつて、奈良時代に制作された仏像の光背は像高の 1/4 をプラスした高さという共通比率が存在した可能性を述べたことがある。すなわち、この時代に像高を基準にした造形的共通規範があったとしたわけだが、仏像のかたちを決めるにあたってこうした共通規範がどこまで波及するのか、下図作成の仕組み解明にまでには至らなかった。しかし天平彫刻に対して誰もがその美しいプロポーションに感嘆するならば、工人間で何らかの造形的共通規範が存在したことはじゅうぶんに考えられよう。この仮説に加えて写真計測アプリケーションの発達や数値分析技術の向上もあり、太田古朴氏らが手書き図面で検討していた問題をあらためて研究し直そうとした、これが本研究開始当初の背景である。

２．研究の目的

本研究では、7 世紀後半から 8 世紀に官営造仏所によって制作された仏像について、仏身をデザインする際の共通規範を探ることにより、下図作成と立体化の工程を明らかにすることを目的とする。それとともに、下図作成の技術や運用という一連の過程の源流や伝播についても考察する。

人体の理想的比率という概念は海外で紀元前から存在し、それに関する研究も数多おこなわれてきた。日本の仏像についても、平安時代中期以降の仏像大量生産時代をテーマとした造形的共通規範についての先行研究はいくつかある。しかしながら、平安時代以前の埌塑的造仏、つまり塑像や金銅仏、乾漆は現存作例が少ないために体系的整理が実現せず、しかも粘土で型を造るために目印としての錐点のような根拠を求め難かった。一方、絵画については法隆寺金堂壁画や古墳壁画が一定の下絵をもとに描かれていることが判明しており、彫刻と絵画の造形的連携がいかにおこなわれていたのかも焦点とすべき問題である。これらを整理すると以下のような項目を研究目的として挙げられよう。

⑴　官営造仏所の工人間で共有されていた造形的共通規範の探索

報告者が導いた仏身 1 に対して光背高 1.25 といったわかりやすい基準値を埌塑的作例の仏身から求める。

⑵　中国や朝鮮半島との規範比較

中国や朝鮮半島の作例との比較検討により、当時の日本的嗜好を明らかにできる。清朝乾隆年間漢訳の『造像量度経』は、ラマ教での仏像制作の下図作成法を説いたものである。本研究とは時代も地域も異なる場で、下図作成に造形的共通規範が活用されていた点が重要である。報告者は、造形的共通規範が中国南北朝時代に発生して唐代に完成したとみているが、この点を明らかにしていく。

⑶　国内地域差の検討

7 世紀後半~8 世紀の現存作例のうち、京から遠く離れた地方仏を官営造仏所の手によるものでないと判断するポイントは、像のバランスや技法であろう。これこそ造仏所に造形的共通規範が存在したと示すものだが、逆に地方に規範が伝わらなかったことになる。京での造形的共通規範を解明できれば、規範がいかにどこまで伝播したのか判断できる。

⑷　仏像制作時の素材や工人調達の実態調査

「藤原豊成糸進状」(『大日本古文書』25-206)には、豊成が刺繍の千手観音像を造らせるにあたり「様」に基づいて糸六十匂を寄進したことが記されている。すなわち「様」によって材料が調達されているのである。稲木吉一氏によれば、古代の文献にある「様」や「仏本」の語は下図であるという(『佛教藝術』171)。ものづくりには、下図→必要資材の選定→予算確保→手配→運搬といった過程のほか、工人数、労賃の算出→人員確保や制作期間の算出と調整といった会計経理面の作業も必要となる。さらには仏像を安置する建築の造営スケジュールとの調整なども必要となろう。すると、寺院造営の大プロジェクトは小さな一枚の下図から始まるのではないか。この点を意識して文献精査をおこなっていく。

３．研究の方法

ここでは、上記研究目的に沿って記述していく。

⑴　仏像の法量(寸法)を計測する。対象作例はおよそ 400 件で、実測不能な場合は三次元写真応用計測システム Kuraves-MD を使用する。

⑵　⑴と同様に中国、朝鮮半島の作例でも計測をおこなう。

⑶　⑴と同様に、官営造仏所制作ではない地方の作例や時代を違えた作例の計測をおこなう。

⑷　資財帳を中心に、文献史料の精査をおこなう。

４．研究成果

本研究は 2018 年に開始したが、報告者の事情やコロナ禍により数回の延長をおみとめいただき今回の報告にいたった。事情に配慮していただいたことに深く感謝申し上げる。

さて、研究成果として以下 3 点を報告したい。

⑴　埌塑的造像における基準点

平安時代に木彫像が中心となり、それらの像の一部には「錐点」と呼ばれる目印がのこされて

いることから山崎隆之氏（『愛知県立芸術大学紀要』19,1986）や冨島義幸氏（『日本宗教文化史研究』15-1,2011）によって錐点の役割や位置について丁寧に分析されている。しかしながら埝塑的造像（塑像、金銅仏、乾漆）には錐点のような目印がのこらないために、造仏の現場で何を重要なポイントとしていたか不明である。本研究で計測にあてるべき時期にコロナ禍が重なったために現地での実測は困難であったが、写真計測やかきおこし図作成に時間をかけて分析を重ねた。

本研究の前提として「なぜ仏像の大きさを文字であらわす際に高さしか記述しなかったのか」という問題を提起していた。すなわち、丈六といえば立像の場合は480㎝、坐像の場合は240㎝であって幅の記述がない。結果、髪際（髪の生え際）から顎先がひとつの基準値であると推定するにいたった。なお、顎にたっぷりとした肉付きがなされる作例があるが、多くの場合で面幅と髪際顎はわずかな誤差で一致する。つまり、髪際顎を基準とした正方形のなかに面部をおさめるが、顎および顎下に肉付けをするためにやや面長にみえるのである。基準値のポイントは、いわゆる「顎先」と呼ばれる部分である。太田古朴氏の研究（『仏像彫刻技法Ⅰ　造像法・木割法』1965）では顎下にポイントを置いて仏像を分割していたが、今回の結果では顎先にポイントを置いた方が単純分割できるとわかった。仏身各部のおおまかな割合を決定してから、光背や台座といった荘厳具のサイズが決まっていくことになるが、奈良時代のように夥しい造仏を重ねていた時代は丈六ではこの数値、等身ではこの数値、といった具合に像高さえ指定されればあとは自動的に数値を割り出せるシステムになっていたのだろう。具体的な分割数値については、あらためて報告したい。

興味深いのは、平安時代以降の木彫仏の基準とされているポイントがほぼ埝塑的造像にみられることである（山崎隆之氏論考掲載の中世における木割）。おそらくは官営造仏所で埝塑的造像が流行した８世紀、髪際から顎先がひとつの基準値となって整理され、木彫仏制作へと移行継承されたのであろう。前掲の『造像量度経』でも顎先が基準点となっていることも付け加えておきたい。

⑵　中国唐代の作例「旧光宅寺石仏龕」での計測

本研究ではコロナ禍のために海外調査がかなわなかったが、東京国立博物館、奈良国立博物館、九州国立博物館などに分置されている「旧光宅寺石仏龕（宝慶寺石仏龕）」を分析対象とした。石松日奈子氏（『Museum』701,2022）によってこれらの作例が早崎梗吉によって日本にもたらされた経緯が明らかにされており、さらに制作年代や事情については本山路美氏（『美術史研究』18,1981）の論考に詳しい。先行研究によると、石仏龕は８世紀初めの唐における非常に高い水準の技術力をもって制作されたことがうかがい知れる。そのため本作例は奈良時代の日本にもたらされた造仏の源流をあらわしている重要作例といえる。

石仏龕は32点現存し、日本に21点、ほかアメリカや中国に11点ある。32点の石仏龕は如来を中心に左右菩薩を置く三尊型と十一面観音独尊型がある。⑴の検討をうけて今回は三尊型を調べたが、一見すると移坐や結跏趺坐の像容であるばかりか、光背や台座の形状もバラエティに富んでいる。いずれも高さ100㎝少々、幅80～90㎝の画面中央に如来像を配置する。これを写真計測にかけ、さらにかきおこし図を作成して分析したところ、やはり⑴で導いた割合と近しい結果が出た。

⑶　絵画作例と造仏との関係性

仏像を制作するにあたり、下図をもとに立体化していくはずである。そこで絵画作例における顎先に注目してみると、法隆寺金堂壁画や敦煌壁画ではあくまで面部の内側に一条ラインを描いて表現するのみで、顎先は面部のアウトライン形成に無関係に置かれていることに気付く。とはいえ顎先のラインを引かない作例も多く、絵画での面部アウトライン下部は顎先ではなく、顎から頸部にかけてのいわば奥行きを含む点が重要なようである。この部分は太田古朴氏が基準としていた顎下の点にまさに一致する。しかし先述のように、立体である仏像の方は顎先を基準点としていたと考えられるため、平面から立体に変換する際に工人がどのポイントを採用していたのか精査していけば官営造仏所での造形過程がより鮮明になるかと思う。今回の研究ではこの点を整理する時間がなかったが、いずれ報告したいと考えている。

最後に、本研究の成果をまとめたうえで今後の課題を挙げておきたい。本研究では、平安時代の木彫仏制作以前の埝塑的造像の時代に中世にみられるような仏身の比率が存在したことが確認できた。しかし仏像は建築という舞台あっての存在であり、今後仏像と建築の有機的関係についてデータを援用して説得力のある説明ができるよう研究を重ねていく所存である。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計0件

〔学会発表〕　計0件

〔図書〕　計4件

１．著者名 大橋一章・森下和貴子・角田勝久・金志虎・中安真理・井上豪・片岡直樹・小野佳代・三宮千佳・山本妙子・中野聰・磯貝誠・小林裕子・眞田尊光・萬納恵介・上杉義麿・松原智美	４．発行年 2020年
２．出版社 里文出版	５．総ページ数 432
３．書名 正倉院宝物の輝き（小林裕子執筆部分　白瑠璃碗と瑠璃坏・正倉院のガラス製品・正倉院の年中行事品・正倉院の経典と経帙・正倉院の伎楽面）	

１．著者名 長岡龍作・星野達雄・井上一稔・犬木努・久保智康・小林裕子・藤岡穣・田中健一・廣岡孝信・淺湫毅・古谷毅・尾野善裕・沢田むつ代	４．発行年 2021年
２．出版社 雄山閣	５．総ページ数 140
３．書名 美術史と考古学（小林裕子執筆部分　寺院遺跡と伽藍と尊像）	

１．著者名 大橋一省　片岡直樹	４．発行年 2019年
２．出版社 里文出版	５．総ページ数 400
３．書名 法隆寺　美術史研究のあゆみ	

１．著者名 大橋一省　片岡直樹	４．発行年 2019年
２．出版社 里文出版	５．総ページ数 400
３．書名 法隆寺　美術史研究のあゆみ	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関